

厳寒に三十九人の青カンの者

越冬現場から訴える

①

昨日のアオカン(野宿者)、炊き出し数は、一六〇人、一七二食だった。例年にもみると、越冬突入時で、第7回110〇人、第8回1108人、第9回1166人。アオカン総数は、第7回1179、第8回1193、第9回1185、第9回1186六人で増大の一途をたどっている。

76、78年にかけては、73年の石油ショック、75年のどん底の落ちこみから、資本と国家による経済再編、公共事業等の増大で景気は一定上昇している。釜ヶ崎も73、75年当時からみると、76、78年に

かけては仕事がふえつづけており、今年は史上最高だそうだが。にもかかわらず、なぜ仕事量等に逆行してアオカン等がふえるのだろうか？ 単純発想からみれば、仕事が増えれば、生活が安定し、アオカン等はへるはずだが……。

これらのことは資本の末端切り捨ての拡大と国家の見殺し政策の強化をものごとくしている。この間、資本は恐慌からの脱出を計るために、企業の統廃合、労働者の合理化等を行い、再編し、収奪を強化してきており、そのしわ寄せは、とりわけ、高令、病弱「障害」者等に集中的に向けられてきた。こういった危機的な情勢の中で、行

政、国家権力は、独占資本の支配を強化するために「クスパリ」「浮浪者」等の差別を煽り、元氣な労働者との分断を強め、反動政策を押し計ってきた。

福祉センターの理事は次のようなことを放言している。「釜の『不良』労働者(高令、「障害」病弱者)は一切めんどろはみない」と。

これは国家権力の切り捨てと飢え死攻撃の表われであり、これら殺人攻撃からわが身を防御し、仲間うちから一人の死者も出さない闘いと同時に、資本と国家権力の差別分断、反動攻撃を打ち破っていかねばならない。そして一人でも多くの闘う仲間を作り出し、資本とその国家権力を打ち倒さねばならない。越冬闘争に断固として立ち上げ、(『日刊えっとう』第二号 79・12・26より)

②

山谷(東京)、寿町(横浜)

笹島(名古屋)の寄せ場と同様、ここ釜ヶ崎の日雇労働者たちは、毎年、この厳寒の中で何百人もの人たちが青カン(野宿)を余儀なくされ、だれにもとられることなく死んでいるのが現実です。その多くが衰弱死、凍死、病死であり、毎年三百人もの人たちが行路病死しているのです。とくに、寒さと仕事が極端に少なくなる冬場にはそれが集中します。釜ヶ崎において、冬は死の季節なのです。今年も十二月二十四日の越冬に入ってからでも、少なくとも五人以上の人が死んでいます。

こうした現実を目の当りにして、同じ人間として「一人の死者も出さな」という切実な気持で始まったのが越冬闘争なのです。主な活動は、行政への要求、炊き出し、夜間医療パトロール、医療(生活)相談、入院手続き、病院訪問などです。

現代社会は日雇労働者を踏みつけにしており、わたしたち一人ひ

とりがその犠牲の上で日常生活を営んでいるのです。

人は山谷を悪くいう
 だけど俺たち いたくなりゃ
 ビルも ビルも道路も
 出来やしねえ
 だれも解っちゃくれねえか

と、「山谷ブルース」で歌っているように、ビル、道路、鉄道、下水道、ダム、トンネルなど、どれをとっても、そこには日雇労働者の汗と労力の結晶がしみわたっています。しかし、現実には、社会の産業予備軍、景気の調整弁として、必要とされただけ彼らの労力をしぼり取り、必要がなくなれば真っ先に切り捨てられ、見殺しにされ、果ては「行路病死」という痛ましい形で殺されているのが、日雇労働者なのです。

福祉国家・日本といっても、日雇労働者の実情は、住居、就労、食事など生存の最低条件すら保障

されず、かつ差別や偏見、蔑視も加わって、大都市の片隅に放置されているのが現実です。しかも、こうした現情に立ち向かおうとするわたしたちに対してすら「過激派」というレッテルを張り、抹殺しようとしているのです。

しかし、わたしたちは、決して負けてはいません。なんとかしてこの暗黒の中にひとつの突破口を見出そうとしているのです。

③

昨年の越冬期間中に、わたしたちは労働者のみなさんと共に、青カン者の実態調査をしました。その動機の一つは、いくら夜間医療パトロールや炊き出しをやっても、青カン者は減るどころか増える一方であるのはどうしたことかという点でした。その結果、八二人中、実に六七人がどこかに病気を

もっていることがわかったのです。つまり、青カン労働者の五人中、四人までは病人なのです。

そこで、わたしたちは、これまでの活動を再検討して一つの試みを計画しました。それは、青カンの一つの原因である病気に積極的に取り組むことにより、青カン者を一人でも減らすことができな

いかということなのです。

わたしたちは、献案を前にして今年もキリスト教釜ヶ崎越冬委員会を結成しました。十二月二四日から三月三一日までを越冬期間として、テーマに「釜ヶ崎の病気を掲げました。例年の夜間医療パトロール、炊き出しへの支援に加え、医療相談(とくに結核)に力を入れると同時に、行政当局に要求活動をしていく中で、日雇労働者の生存権の保障、自立と解放をめざしているのです。

越冬に入って、医療券を通して入院した労働者が百人以上います。この人たちが完治するまで病院を訪問し、アフターケアを行うこともわたしたちの大切な働きです。しかし、これには大阪市、府下、

あるいは和歌山県から兵庫県までの各地の病院に分かれて入院しているのが人手が必要です。

さいわい、結核専門のケースワーカーとして入佐明美さんがわたしたちと共に働いてくださるようになりました。ここに至るまでには入佐さん本人はもちろん、ネバールのクリスチャンドクターで知られる岩村昇先生、大阪社会医療センターの本田良寛院長などの協力がありません。入佐さんの働きは、わたしたちの願いである釜ヶ崎から結核をなくす運動に結びつくと共に、結果として青カン者が減ることを願っています。

越冬活動のために全国の教会、学校、個人などに募金を呼びかけましたが、それに応えて一月二十日現在で約四八六万円が集まりました。感謝です。わたしたちの活動は、今後は年間を通しての働きとなります。物心面のご支援をお願いする次第です。

(N)



○：12月25日 急に寒波が押し

かけ、昨日、労働者二人が路上で死亡。「一人の死者も出さな」を合言葉に越冬をはじめ初日に死者とは、無念。今日は娯楽室のクリスマスで、早朝からオープン。ピアノ配り、飾りつけ、音楽などを用意。田中、福田さんがマンドリンとギターの演奏をしてくれる。

ただ、はじめての試みで、こちらから呼びかける形になってしまったが、来年からは労働者自身が企画、運営するクリスマスでありたい。夕方、広場に山積されてあった布団を社会医療センターの軒下に移し、いよいよ越冬活動もフル回転をはじめ。

○：12月26日 早朝四時半頃、労働センターに出てみるが、仕事は殆んどなく、あれほど労働者として配師の車で活気づいていたセン

ターも閑散としている。今朝、また二人の死亡者が出る。今週一杯、早朝の娯楽室を手伝う。美信の誕生日でジェーコブさん、高井さんと共に夕食。

○：12月28日 浜松聖霊短期大学のセミナー。医療センター訪問。むすび会(忘年会)。夜間パトロール(青カン三二六人)。

○：12月29日 炊き出し。セミナー総括。第10回キリスト教越冬委員会。臨時無料宿泊所受付と30日。約千人。

○：12月31日 医療相談。娯楽室深夜まで解放。

○：1月1日 娯楽室3日までオープン。越冬セミナー。テーマ「釜ヶ崎の医療問題」1〜3日まで。釜ヶ崎医療の現状報告。

○：1月2日 阪奈病院訪問。夜、山谷で働いている今村昌耕医師による「日雇労働者と結核」の公開講演会。

○：1月3日 恒例の三角公園でのもちつき大会。越冬セミナー

まとめ。ルーテル教会牧師現場研修セミナーはじまる。5日まで。

○：1月4日 医療相談。稲垣さんを囲んでの討論会。むすび会(新年会)。夜間パトロール(青カン者二二人)。

○：1月5日 第11回越冬委員会。

○：1月6日(日) CS。新年礼拝(聖餐、すきやき)。越冬突、喜望の家で子ども会。

○：1月7日 医療相談。マザーテレサのグループ二人、山谷から来訪、11日まで。保母さんと新年会。

○：1月9日 南海地区、京都教会、天王寺教会、大阪教会奉仕日。パレスチナの戦傷児の医療をすすめる会、医療センター。SC M現場研修実行委員会。

○：1月10日 ジェーコブさんアシア学院へ帰る。聖書と心理(ピリビを終りヨハネスの福音)。

○：1月11日 市役所、市大訪問。むすび会(体験発表)。

○：1月12日 スタッフミーティング。越冬委員会。中間報告集委員会。二月十日午後二時から大韓教会西成教会で開催を決定。

○：1月14日 医療相談。住之江ボランティア奉仕。医療券の整理。河西立子さん来訪、三月まで。

○：1月15日 子どもたちと長居公園へ。

○：1月16日 アルコール問題研究会 於研究所。

○：1月18日 大正めぐみ保育所訪問。喜望の家世話人会。むすび会(誕生会)。

○：1月19日 スタッフミーティング。子ども会スタッフミーティング。越冬委員会。

○：1月20日(日) CS。日曜礼拝。あすなる会六周年記念大会於自彙館。

○：1月21日 医療相談。社会医療センターでX線と糖の検査。異状なし。テーゼから二人来訪。午後、医療相談三人中、二人医療券。入院手続き。